



よみかき茶屋での1コマ(2003年2月 総合生涯学習センターにて)

もっともっと前に進みたい

日本語・韓国語 通訳

今年「国連識字の10年」のスタート年に当たる。識字とは「文字を識(し)る」こと。差別や貧困などで学校に行きたくても行けなかった人々や、歴史的により日本に居住する韓国・朝鮮人を始めとした在日外国人、あるいは国際化の進展による新たな渡日者や外国籍住民など、日本語の読み書きに不自由している人々を対象に、識字学級、日本語教室が開催されている。

大阪でも、識字学級や地域日本語

学習の取り組みを総合的に推進するさまざまな事業が行われている。そのひとつに大阪市立総合生涯学習センターで開催されている「よみかき茶屋」がある。1990年5月に北市民教養ルームで発足した教室を、02年11月に引き継いだものだ。

発足当時の学習者は、夜間中学にも行けず、ひらがなの読み書きから勉強したいという在日韓国・朝鮮人が中心だった。現在では日本に新しくやってきた外国人も多く、十数カ国約120人が

日本語を学んでいる。

これら学習者を指導するのは、約50人のボランティア講師だ。各グループ(主として講師1対学習者2)ごとに日本語のテキストのほか、新聞の折り込みチラシなど生活に密着したものを教材に学習している。

授業の途中にあるティータイムが特徴。おやつをつまみながらスピーチの練習をしたり、歌ったりすることでお互いを理解し合うことに効果を上げている。また、生活相談や遠足、他教室との交流などにも活発に取り組んでいる。

このよみかき茶屋で、ボランティア講師の1人として活躍しているのが、韓国籍の元淑喜さんだ。実は元さんは、よみかき茶屋の元学習者。在籍中の98年に日本語能力試験1級に合格し、99年に講師に採用されて

プロフィール 元 淑喜(ウォン スヒ)さん

1959年、韓国忠南生まれ。1歳の時、父親の転勤でソウルに移る。78年、高校卒業と同時に印刷材料販売会社に就職し経理事務などを担当。取引先に日本企業があったため日本に興味を持ち、86年から日本語教室に通う。87年、単身で来日し大阪市内の製版会社に就職。翌88年、日本人と結婚。96年2月から日本語学習のため北市民教養ルームの識字学級「よみかき茶屋」(02年10月から総合生涯学習センターが継承)に参加。97年、日本語能力試験1級に合格し、99年から「よみかき茶屋」で日本語のボランティア講師として採用される。現在は、ほかに公共施設などで開催される日本語教室と韓国語教室の講師やセミナーの司会、大阪弁護士会の通訳などでも活躍中。

いる。よみかき茶屋でただ1人の、外国人ボランティア講師でもある。そればかりか、今では個人的に韓国語や日本語を教えているほか、大阪弁護士会の通訳もこなすなど、活動の幅は広がるばかりだ。

ソウルで日本語教室へ 技術者目指し来日

元さんは、韓国の中中部で生まれた。1歳のとき父親の転勤でソウルに移り住んでいる。高校卒業後、印刷材料会社に就職し、経理事務などを担当していた。

そんな元さんの運命を変えるのは、会社の取引先のひとつに日本の企業が存在していたことだ。来社する日本人スタッフを見ながら、次第に日本への興味を募らせることになる。

「そのうち、早く日本語を覚えたいと思うようになりました。日本の取引先とも話せるし、日本に行ければ、印刷技術も習って技術者にもなれると考えたのです。26歳になっていたが、ソウル市内の日本語教室に通いはじめた。

韓国では、英語教室も日本語学校も、入社前の時間を利用して勉強するケースが多いという。会社の始業時間は午前9時。元さんは午前7時から7時50分まで日本語を受講し、終了後会社に向かう生活を2年間続けた。

来日は87年だった。取引先に紹介してもらった福島区の製版会社に、アルバイトとして入社している。ソウルの事務所で何度か会ったことのある日本人と結婚したのは、来日2ヵ月後である。



よみかき茶屋での1コマ(2002年6月 北市民教養ルームにて)

結婚後、正社員に採用された。仕事は専門用語が多いためすぐに慣れたが、日常の会話は相変わらず不自由だったという。会社近くの小料理屋さんで退社後アルバイトを始めたのも、日本語学習のためだ。「会話が勉強できて日本料理も覚えられるし、お金も頂ける。一石三鳥みたい(笑)」と。

子どもが誕生したのは、94年1月だった。「たよりない日本語で自分がちゃんとできないのに、子どもができたら勉強とかで大変だと思った。いないほうが子どものためにも自分のためにもいいと生まなかつたのですが、だんだん歳いくし、ああやっぱり1人ぐらいい居るほうがいいと思って。結婚7年目の決心だった。

よみかき茶屋で日本語学習 日本語能力試験1級合格

会社は出産直前に退社しており、子育てに専念する毎日が続く。だが、子どもが2歳になりプールに通いはじめたことで、日本語の不自由さを再認識することになる。「コーチとの連絡帳に、『いつもありがとうございます。たのしかったです。それしか書けなかったんです。情けないし、これではいけない。子どもが幼稚園に行く前に日本語を勉強なくては』。そう痛感した元さんの目に止まったのが、大阪市政だよりに掲載されていた中学校夜間学級の生徒募集記事だった。

「さっそく電話したんですけど、高校出てるからダメと分かりました。かわりに紹介されたのがよみかき茶屋だったのです。通い始めたのは、96年2月だった。

「子育てのストレスも結構溜まっていたんです。でもよみかき茶屋で初めて韓国の人といっぱい出会って、韓国語で話したり笑ったり。



韓国料理講習会でチヂミをつくる(2003年6月)

やっぱり韓国人との交流でストレスが発散していったような気がします。それで勉強もできるし、生活習慣や文化もわかってきた。心の壁も言葉の壁もみんな解決してもらったっていう感じです。」

週1回のよみかき茶屋は、出来る限り休まないことを心掛けた。「問題集を何回も繰り返し、分からない部分は講師にしつこいほど聞いた」という。知り合いの留学生から教材を貰い、夜に子どもを寝かせたあと時間が許さざり取り組んだものだ。こうした勉強が実を結び、98年1月、日本語能力試験の1級に合格する。よみかき茶屋では初の快挙だった。

翌99年、外国人講師の第1号としてよみかき茶屋に迎えられた元さん。その後はセミナーの司会や講演などの依頼も多く、昨年からは大阪弁護士会の通訳にも登録。被疑者と弁護士との接見時などで通訳の仕事をはじめている。

その元さんがいう。「よみかき茶屋がなかったら、今の私はなかったんです。だから日本語に不自由している人は、勇気を出して来てほしいですね。悩みを打ち明けあって、勉強も兼ねた会話もして皆助け合っていたらすごく楽しいですし」と。

今後の抱負を聞くと、こんな返事がかえってきた。「まだ満足していません。これからも勉強して、いろんなことにチャレンジしたい。ここで止まらないで、もっともっと前に進みたいんです。」

(文・脇本勤/表紙写真・高島悠介)